

奪われた日常 尊さを学んだ

その若き看護師は、初めての単身での海外渡航、そして初の国際支援活動で、ウクライナ人の避難者支援にあたった。国際医療NGO「AMDA（アムダ）」の長谷奈苗さん（27）。初めてだらけの体験のなかで「日常の大切さ」を学んで帰ってきた。

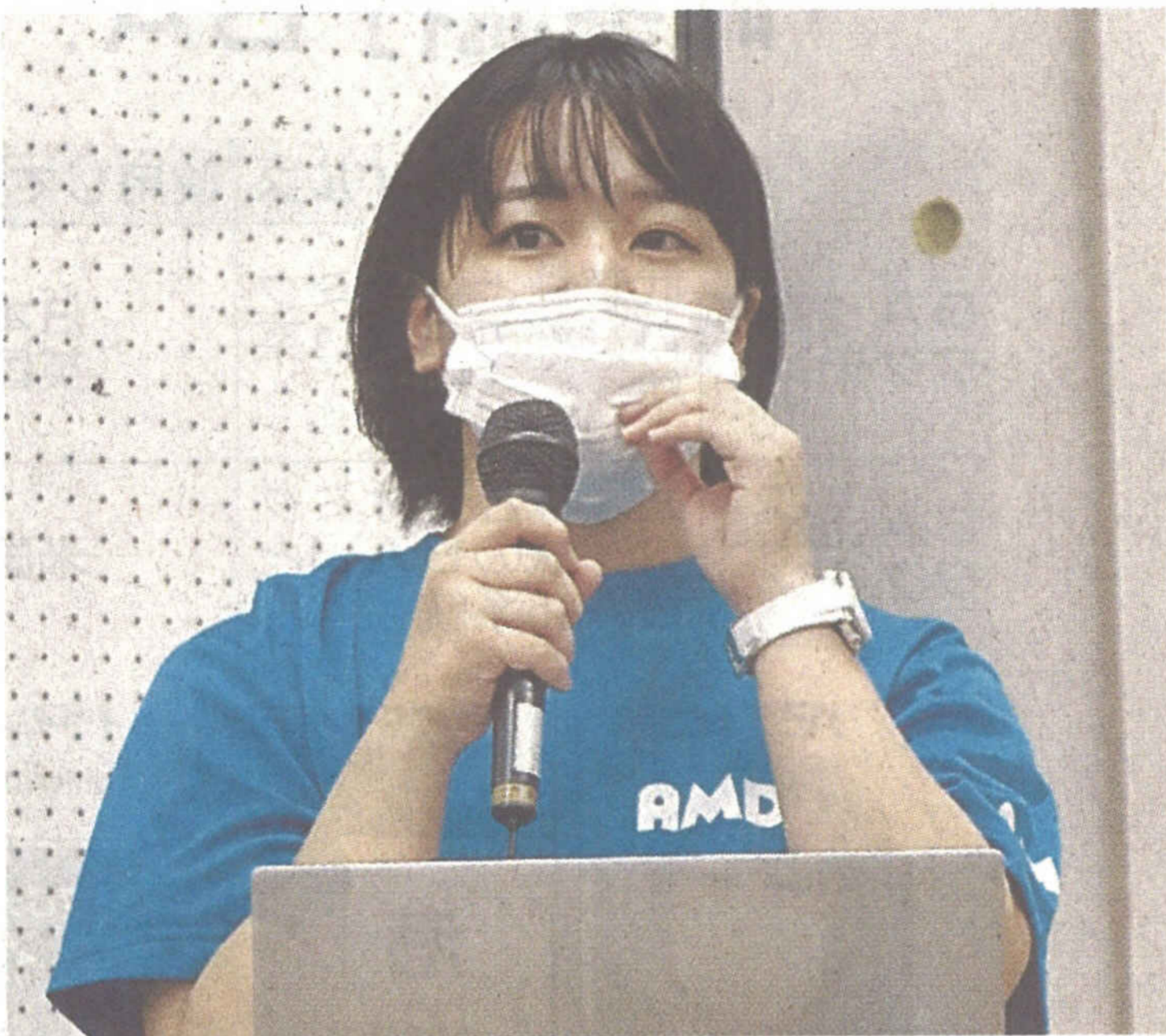
長谷さんは6月の1カ月間、ロシアの侵攻が続くウクライナの隣国ハンガリーに渡り、国境近くで避難者の支援に従事した。AMDAに加わったのは今年4月。1人での海外渡航は初めてだったという。

AMDAは1984年の発足以降、災害や紛争が発生した60カ国241件（9月現

ウクライナ避難者 支援の看護師報告

在）で緊急医療支援活動に取り組んできた。ロシアによる侵攻以降は、医師や看護師らを10回にわたり派遣。ハンガリーの医師らによる「ヘルプセンター」に合流し、診療や医薬品のニーズ調査などに取り組んできた。

長谷さんは避難者の健康チェックや、ウクライナからの道中でけがをした人たちの処



ウクライナ避難民への現地支援について報告する長谷奈苗さん＝笠岡市吉田

AMDA

1984年、菅波茂医師（75）が岡山市に設立した国際医療NGO。「困ったときはお互いさま」の精神に基づき、災害や紛争発生時に医療・保健衛生面を中心とした緊急人道支援活動を展開している。32カ国・地域に支部を置く。名称は設立時の「アジア医師連絡協議会」の英語表記の頭文字からつけた。

「目の前の人 元気に」 その一心で



スポーツイベントで、避難してきた子どもたちとふれ合う長谷奈苗さん（左）＝AMDA提供

置を担った。新型コロナウイルスの蔓延を予防するために掃除と消毒、手洗いの働きかけも続けた。各国から寄せられた医薬品の仕分けも担当した。

ウクライナ人男性の多くは総動員令により国にとどまらなかったため、避難してきた人たちの大半は女性と子どもだった。

母親たちは疲れ切った心身で次の避難先を案じていた。その姿を見た子どもたちは、遊ぶのを我慢しているようだった。「笑っていないと子どもが不安がる」と説明を受けることもあった。

長谷さんは「子どもたちの遊び相手となり、母親には休んでもらうのも私の務めだった」と活動を振り返る。言葉

の壁はスマホの翻訳アプリで取り払い、母親たちの集まりでは積極的に話を聞いた。

「食べ物と寝る場所がある。幸せではないが不幸ではない」。避難者のこんな言葉には、日常を奪われた苦しみが伝わった。「可哀想だからではなく、目の前の人が少しでも元気になってくれれば」。そんな一心で活動を続けた。

長谷さんは赤磐市出身で、この春まで香川県の病院で看護師として5年間勤務していた。院外の看護師たちが働く姿から自分の役割を学びたいと思い立ち、AMDAに移った。いまも連日、現地スタッフと連絡を取り合い、活動をサポートしている。

今月、市民団体「明日への架け橋Kasakoka」の主催で、笠岡市内で報告会を開いた。約30人の聴衆に、かみしめるように語った。

「日本でも毎年のように自然災害で日常を奪われている人たちがいる。ウクライナ支援を通じ、日常の大切さを学んだ」

（小沢邦男）